

野原北天

三浦綾子

下



朝日新聞社

三浦綾子

天北原野

下

天北原野 下

定 価 740 円

昭和 51 年 5 月 20 日 第一刷発行

昭和 51 年 7 月 20 日 第三刷発行

著 者 三 浦 綾 子

発行者 朝日新聞社 角 田 秀 雄

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 東京 北九州
大阪 名古屋 朝日新聞社

© 1976 三浦綾子

0093—254360—0042

目

次

野バラ	7
ツンドラ	22
紋白蝶	37
盆提灯	67
貯炭ストーブ	82
犬の声	104
煤	112

水脈

142

鬼志別

163

怒濤

178

海の墓

237

参考文献並びに参考資料

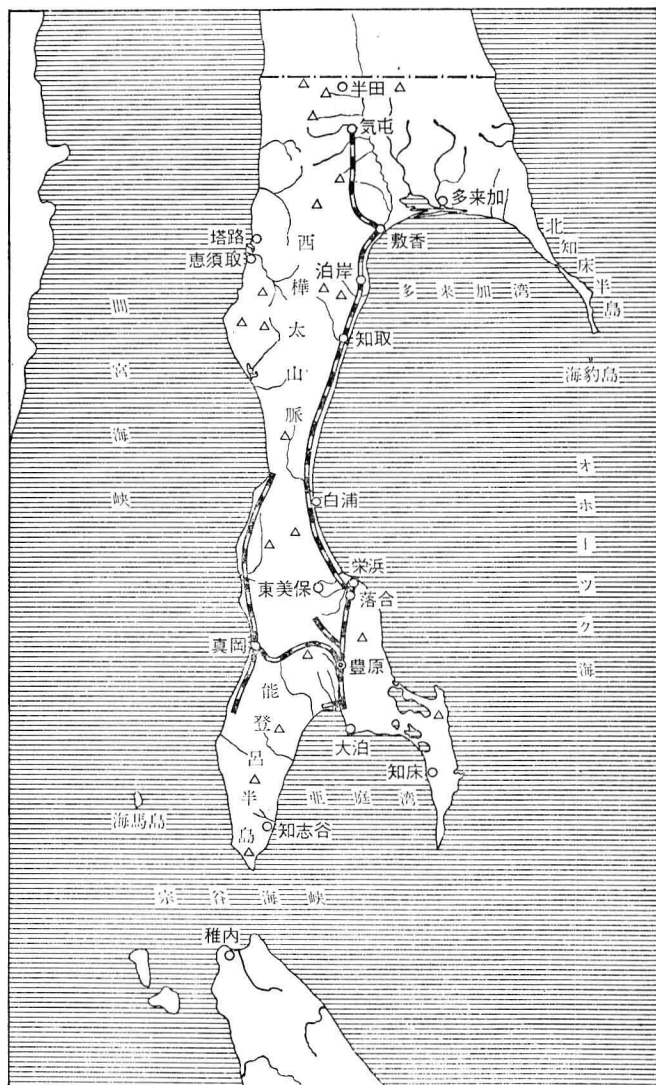
267

地図
吉沢家久

裴
頓
生
沢
朗

天北原野

下



野　　巴　　ラ

一

あき子は昼餉の仕度をととのえて、二階の書斎に孝介を呼びに行った。孝介の書斎は、夏でもドアが開け放しになっていることがない。飴色によく磨きこまれた厚いドアの前に立つと、あき子は何か自分が疎外されているような怪しさを感ずる。

ノックをすると、「お入り」といういつもの静かな声が聞こえる。夫の書斎にノックをしなければ入れないということに、あき子は今日も抵抗を感じた。

「お食事ですよ、あなた」

ドアを開け快活にあき子は声をかける。が、部屋には入らない。

「ああそう、今行くよ」

読んでいた本から目を外らさずに孝介が答える。

がっしりとして軋みひとつしない階段を静かに降りながら、あき子はいよいよのまないさを感じた。孝介が何を読んでいるのか、あき子にはわからない。札幌の本屋から、時々本が何冊かずつ届く。その包みを孝介は決して人にさわらせはしない。荷ほどきはすべて自分でする。本が好きなことだけは、誰にもわかる。

（網元の旦那に本がそんなに必要だろうか）

時々あき子はそう思う。本を読むために孝介は書斎の中に閉じこもる。時には夜明けまで読んでいることもある。あき子はいつしか、書物に対して敵意に似た思いを抱きさえするようになった。

盛りつけたご飯が少し冷める頃になって、孝介が降りて来た。京二が孝介の傍の椅子にちょこんと坐って、床に屈かぬ足をゆらゆらと動かしている。

「足を動かすんじゃないのよ、京二」

あき子の声が少し尖る。京二がびっくりとしたように足をとめる。孝介が坐って食事が始まった。傍の小さなテーブルに、今日来た郵便物が載っている。封書五、六通の上に、葉書が二通あった。飯をひとくち口に入れて、孝介は郵便物に手をのばす。またはじまったと、あき子

は思う。何か読んでいなければ落ちつかないのかと、眉根をよせる。

「完治兄さんから来てるわよ」

「ほう」

一番上の葉書は、東京の古本屋からの書籍の案内であった。その下に完治の葉書があったのだ。

「もう二カ月になるなあ」

完治の葉書を手に、孝介が呟く。

へ拝啓 みんな変わりはないだろうね。澄男や京二も元気がね。

東京から達吉兄貴が帰ってきて、よく働いている由、貴乃からもおやじからも知らせがあつて安心している。一つ星は辛いと思っていたが、この間中隊長が替わつて、何とそれが、山王製紙の検収員だった梁田という男だ。で、ま、適当にやっている。留守宅をよろしく。旭川はやたらに暑い。

早々

孝介は低い声で読み、それをテーブルに置いた。京二が黙つて、卵焼きをつついている。

へ貴乃からも、おやじからも知らせが……

というところが、孝介の心にかかる。貴乃は完治にどんな手紙を書くのだろう。完治の乗った連絡船が、棧橋をかなり離れた頃、完治の声が風に乘つて聞こえて来た。「お貴乃う……」

ふりしぼるような、哀切極まる声であった。妾の梅香と一緒に船を見送つていた貴乃にとって、それはどんなに胸に沁みたことだろう。

孝介がそう思っている時、あき子は別のことを考えていた。

へ澄男や京二は……

兄の完治はそう書いて来た。何気なく書いたのかも知れないが、幼い澄男の名のほうに先に書かれていることに、あき子はこだわっていた。本来なら年齢の順に名が書かれて然るべきだ。完治は何となく京二をうとんじていた。むろん、京二は養子として迎えた子である。澄男のほうを先に書いたのは、完治としては当然かも知れない。だからあき子は、完治に対しては、別段文句があるわけではない。いつのまにかあき子は、例の如く孝介に對してこだわっているのだ。

(なぜ京二を、この人は引き取つたのだろう)

何も自分たちの子供として、育てる必要はなかったと、あき子は孝介を詰^なりたい思いにもなる。

京二は上目づかいであき子の顔を盗み見ながら、小さなスプーンで、みそ汁をのんでいる。只それだけのことなのに、あき子は京二に対していらいらとなる。こういらいらすることも計算に入れて、孝介はこの子を引き取ったのではないかと、あき子はいつも思う。

「これがお前の生んだイワンの子だぞ」

いつも孝介が、そういつて京二を自分の前に突きつけているような気がする。あき子の心の中で、

(だってあの時、仕方がなかったもの)

と開き直る。

(この子を生みたくなかったのは、当たり前じゃないか)

あき子はふてぶてしく呟くこともある。京二を生んだ日の夕べ、病室の白い壁に、窓際の銀杏の枯れ枝が、くつきりと鋭く映っていたことを、あき子は忘れてはいない。その銀杏の枝の影の鋭さが、自分と京二の関係を象徴しているように思われた。アルミニウムの食器の触れ合う音や、看護婦のあわただしく廊下を走る足音や、クレンジール液の臭いなどが、それに附随してあき子の胸に

今甦る。仙台のあの病院は、京二の生まれた三年前と今も変わらない日常をくり返していることだろう。

あの仙台の病院のベッドの中で、色白の京二に乳房をふくませながら、

(なぜ死んで生まれてくれなかったのか)

と、あき子は幾度思ったことか。そのイワンの子に、京二という名をつけ、他にやってしまった時は、心底からほっとしたものだった。それが、澄男を生んだ途端に、孝介は京二をもらうと宣言した。最初からそうは言ってもいたが、まさか本気で自分たちの子としようとは、あき子は考えてもいなかった。

三年前に生まれた京二が、口もきき、走り回るようになって自分の前に現れた時、あき子は孝介に底深い恨みさえ抱いた。京二の目は一段と青く見えた。そして顔は透きとおるように白かった。日本人の子とちがって、ずっしりと胸が張り、腰に肉がついていた。どこから見ても明らかに混血児だった。あき子は脅迫されているような気がした。

(ぼくは姦淫によって生まれた)

京二がそう告発しているように見えるのだ。

「夏休みだなあ」

「え？」

あき子はのろろと動かしていた箸をとめた。通りで子供たちの騒ぐ声が聞こえた。白樺の木立の向こうに、明るい笑い声が上がった。

「いやに賑やかだと思ったら、今日から夏休みだよ」

孝介が窓のほうを向いたまま言う。

「ああそうねえ」

気のなさそうに返事をして、京二を見る。口もとに飯粒をつけた京二が、じっと自分を見つめている。そのまなざしが、どきっとするほどイワンに似ている。あき子は視線を外らし、部屋の隅に吊った青いハンモックの澄男に目をやる。

「須田原の子供たちをどこかにつれて行こうか」

「どこかに？」

あき子はぼんやりと答える。夏休みと、今の孝介の言葉がつかまらない。

「うん、完治君もないことだし。子供たちを夏休みのうちに、どこかにつれて行ってやろうかと思ってね」

「ああ、そうね」

やっと納得した顔になり、

「弥江ちゃんも加津夫ちゃんも、きつと喜ぶわ」

「京二、お前も一緒に行くか？」

「うん、いく。どこへいくの」

「そうだね、うちの船で、礼文^{れいぶん}にでも行こうか」

「まあ、礼文？」

あき子が、大きく目を見ひらく。そんなにまでしないでもいいのにと、遠慮とも、咎めともつかない表情になる。

「うん、礼文はきれいな島だからね。十日位遊んでくるさ」

「京二もつれて？」

「むろんさ。あき子も行くだろう？」

「あたし？ あたしは無理よ。連絡船でも酔うことがあるんですもの。小さな船は駄目よ。それに澄男もいるし……」

孝介は心が躍った。

「なんだ、君は行かないのか。じゃ、京二もおねえさんに見てもらおうか」

「そうね、おねえさんなら京二は馴^なついてるし、あた

しよりにいいんじゃない？」

「そうだな。しかし、君が行かないんなら、京二もかわいそうだ。船はやめて、敷香しつかのほうにでも行ってみようか」

「まだ澄男のおむつが取れないうちは、どこに行っても駄目よ。あと二、三年すると楽になるけど」

「君が行かないと、おねえさんが遠慮するよ」

「大丈夫よ。加津夫にだって、どこかにつれて行ってって、何度も頼まれているんですもの」

孝介と貴乃のことに、あき子はまだ何も気づいていない。完治も孝介も貴乃も、ハマベツ時代からの、いわば幼馴染みだとあき子は思っているだけだ。

「じゃ、そのうち行く先を決めるよ。完治君に留守をよろしくって頼まれた以上は、何かしてやらなくちゃねえ」
機嫌よく孝介は言う。

「すみません」

あき子は頭を下げる。幾子が一ひっそりと孝介にお盆をさし出して、

「旦那様、お替わりを……」
と遠慮勝ちに声をかける。

「ぼくもおかわり」

京二が、一寸法師の絵のついた茶碗をさし出す。一寸法師は打ち出の小槌を持っている。

「よく食べるわねえ」

思わずあき子と言う。

「たくさん食べて大きくなれよ」

孝介の手が京二の頭をなでる。

二

加津夫はズボンのポケットの中の小銭入れをしっかりと握って、部屋を出ようとした。

「どこへ行く？」

伊之助と話をしていた達吉が顔を上げた。

「うん、ちょっと」

加津夫はそわそわする。柱時計が三つ鳴った。

「まあ、すわれよ。伯父さんが豊原に来てから、まだゆっくり話をしたこともないじゃないか」

「うん」

不承不承、加津夫は白い学生帽をぬいでそこに坐った。

「早いもんだなあ。伯父さんが東京に出てから、十五年近くなった筈だ」

「十五年か。十五年前、達吉お前もまだひよろひよろのあんこだったがなあ」

伊之助が言う。伊之助の前歯は、完治が応召したあと一本欠けた。僅か一本欠けただけで、伊之助はひどく年を取ったような感じがする。貴乃はもじもじしている加津夫をじっと見つめながら、ずいぶん背丈が伸びたと思う。中学二年とは思えぬおとなの体つきだ。

「どうだ、加津夫。お前学校出たら、造材の仕事を継ぐんだろう」

「さあ、わかんない」

頭をかしげる加津夫に伊之助が言う。

「わかんないことがあるもんか。お前は完治の後取りだ。後取りってえのは、おんなじ仕事をするこった。完治だって、俺の仕事を継いだじゃないか」

伊之助の欠けた歯から、唾が出たり入ったりする。

「だけど、伯父さんのほうが年上でしょう。ぼくのお父さんより」

「そうだ、わしのほうが兄貴だ」

「どうしてその伯父さんが東京に行って、病院の事務員をしたりして、後取りしなかったの」

「そりゃあ、完治が造材に向いてたからよ。お前の伯父さんは造材が嫌いだったんだ。なあ、達吉」

達吉はニヤッと笑った。陰気な笑いだ。若い頃も、こんな笑い方をしたことがあったと、貴乃は長火鉢の鉄瓶のふたを少しすかす。炭火が少し灰の中に埋められている。達吉と一緒に東京に逃げてくれと貴乃に迫った時、貴乃はハッキリと断った。今、達吉の陰気な笑い顔を見ると、一緒に逃げなかったことがよかったような気がした。完治と結婚しても、むろん幸せがくるとは思わなかったが、相手が達吉にしても同じだった。孝介以外に、夢を託する男性は、貴乃にはいなかった。

東京から帰って来て一カ月半余り、達吉はほとんど毎日この家に来る。二、三町離れた所に家を一軒借りていゝのだが、仕事上伊之助と打ち合わせることもある。毎日のように顔を出すのだ。達吉を見ると、貴乃は完治に犯された頃の惨めな自分を嫌でも思い出す。達吉が家にくる度に、貴乃は言い難い嫌な気分になる。達吉は完治とちがってまじめだが、何か気の許せないまじめさだ。

孝介のまじめきとは、どこかがちがう。

ニヤッと笑ってから、達吉は加津夫に小声で言った。

「おじじは、この伯父さんより、お前のおやじさんのほうが、かわいかったのよ」

低い声は伊之助には聞こえない。

「ほんと？」

加津夫も声をひそめる。

「ほんとさ。だから伯父さんは東京に行ったんだ」

「何？　何がどしたって、何をごしゃごしゃ言っている」

「あんねおじいちゃん、ぼくね、造材よりもっと金の儲かる仕事をしたいな」

大きな声で加津夫が言う。

「じゃ、何になる？」

「孝介叔父さんみたいのさ。孝介叔父さんは、鰯場の網元でしょ。そのほかに鮭鱒の船を何隻も持ってるでしょ。船が帰ってくる度、ごさつごさつと金が入ってくるでしょう」

「だが、魚って奴は生きもんだ。命がけで追っかけて行かなきゃ、獲れねえしろもんだ。大漁もあれば不漁もある」

る。あそこの船だって、去年一隻ひっくり返ったじゃねえか」

「そこがスリルがあって、おもしろいんだよ、おじいちゃん。男の生活には、スリルがなきゃあ」

「何だとう。この弱虫が、でっけえことを言う」

「第一さ、おじいちゃん。地図を見てごらんよ。海は陸地より広いんだぜ。山の木は、伐りや次に育つまで、何十年もかかるだろ。木なんて限りがあるからな。その点、海は広いよ。魚は獲っても獲っても、毎年卵を生むからねえ。次から次へとおがるしさ」

「いんや、何と言っても造材だ。まだまだ俺たちの生きている間、伐っても伐っても、伐りつくせるもんじゃねえ」

「じゃ、ぼく、ちょっと行ってくる」

加津夫は腰を浮かした。

「どこへ行くの？」

尋ねる貴乃に、

「うん、ちょっと岩田んところさ」

「池上の叔父さんが、八月になったら、敷香のほうに連れて行ってくれるとおっしゃっているでしょう。勉強も

少しはしておかなければ、駄目よ」

「うん、すぐ帰って来てやるからさ」

加津夫は玄関に飛び出していった。

一歩外に出ると、吸いこまれそうな青い空があった。

その下を加津夫はニヤニヤしながら歩いて行く。しっかりと握った小銭入れには、五円札が三枚小さく畳んで入っているのだ。一学期の終わる日、校門を出て来た加津夫を待っていたのは、梅香だった。その梅香が加津夫を誘って汁粉屋に行き、たくさん奢ってくれたあと、五円札を四枚、白いちり紙に包んでくれたのだ。その一枚はこの五日ほどのうちに、雑誌を買ったり買い食いしたりして使ってしまった。

「落合に來たら、いつでもお小遣いを上げるわよ」

梅香は別れ際にそうささやいた。バスで一時間程行けば、いつでも小遣いがもらえるのだと、加津夫は気が大きくなっていった。

三

加津夫は、店の並ぶ通りをぶらぶらと歩いて行く。五

円札が三枚あれば、幾ら使っても使いきれないような気がする。加津夫はついニヤニヤとする。アイスクャンデー屋の前に来て、加津夫は立ちどまった。アンモニヤの匂いがかすかに漂う。アイスクャンデーは好きだが、このアンモニヤの匂いはいやだと、加津夫はちょっと眉をひそめたが、すぐ笑顔になって、

「アイスクャンデー二本ちょうだい」

と声をかける。紺の半纏はんけんを着た若い男が、アイスクャンデーを二本、加津夫に手渡した。加津夫は五円札を出す。

「金持ちだなあ」

うさん臭げに男は加津夫を見た。

「うん」

加津夫は黄色いテラテラしたアイスクャンデーをなめながらニコニコする。

「あんた、どこの坊ちゃんかね」

「ぼく？ 須田原造材のさ」

「なあるほど」

男は納得したように、四円九十銭のお釣りをくれた。加津夫は財布にお釣りを入れ、